Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介致します



合田 直弘

今が旬の競走馬や競馬人をご紹介するこのコーナー。今月は、競馬発祥の地・英国でまさに今、めきめきと売り出し中の若手騎手ビリー・ロックナーン（20歳）をご紹介したい。

ビリー・ロックナーンは2006年3月、調教師ダニエル・マーク・ロックナーンと妻クレアの子として愛国で生まれた。12年から父が拠点を英国に移したため、5歳だったビリーも故郷を離れ、サフォードシャーに移住。ビリー少年はこの頃から父の厩舎の馬にまたがり、調教に参加するようになった。そして、将来は騎手になると固く決意し、学校にも乗馬スボンに乗馬ブーツといういで立ちで通っていたという。

16歳の時に見習い騎手の免許を取得し、22年10月に騎手デビュー。同年11月22日に父が管理するスイスロウーに騎乗し、ウルヴァーハンプトン競馬場のハンデ戦（AW7F36y）を制して、騎手としての初勝利をあげた。そこから順調に勝ち星を伸ばした彼は23年4月までに41勝をあげ、英国オールウェザー見習い騎手チャンピオンの座に輝いている。

さらに23年はカレンダーイヤーで130勝。英国平地競馬の見習い騎手チャンピオンの座にも就いている。この年の5月、17歳だったビリーは英国千ギニーでリチャード・スペンサー厩舎のスイートハーミニーに騎乗。1951年に15歳でクラシック騎乗を果たしたレスター・ピゴット以来となる、年少騎乗を果たした。乗れる若手「ビリー・ザ・キッド」の愛称が定着したのは、この頃からだ。

翌24年4月、ジェームス・モーア厩舎のキューズライクリーに騎乗して、独国のケルン競馬場で行われたG3シュヴァルツゴールドレネン（芝1600m）に優勝。重賞初制覇を果たした。さらに同年6月、ブライアン・ミーハン厩舎のラシュマーに騎乗してG2コヴェントリーS（芝6F）に優勝。ロイヤルアスコットにおける重賞初制覇を果たした。このシーズンは年間で162勝をあげている。

そして25年、ビリーはカレンダーイヤーで223勝をあげ、アンニュアル・フラットジョッキー・チャンピオンとなった。この年の後半から、ゴドルフィン所有馬の手綱を任されることが増え、同年8月にはチャーリー・アップルビー厩舎のレベルスロマンスに騎乗し、独国のホッペガルテンで行われたベルリン大賞（芝2400m）に優勝。待望のG1初制覇を果たしている。

ちょうどこの頃から、ビリーが手綱をとってきたのが、ジョージ・ボーヒイ厩舎のバウエコーだった。25年8月15日、ニューバリーの2歳メイドン（芝8F）に出走したバウエコーは、ここを4．1/2馬身差で制しデビュー勝ち。続いて出走したのが、9月6日にヘイドックで行われたLRアセンダントS（芝8F）で、ここも1馬身差で制して連勝。さらに9月27日にニューマーケットで行われたG2ロイヤルロッジS（芝8F）も1馬身差で勝って、バウエコーは無敗の3連勝で重賞初制覇を果たした。

バウエコーの3歳初戦となったのが、今年5月2日にニューマーケットで行われた、英国3歳3冠初戦のG1二千ギニー（芝8F）だった。鞍上にいたのはもちろん、ここまでずっとこの馬の手綱を握ってきたビリー・ロックナーンである。オッズ5．5倍の3番人気だったバウエコーは、外側馬群後方を追走後、残り3Fから鞍上が追い出してスタンド寄りを伸び、残り150mで先頭へ。そこから2．3/4馬身抜け出す完璧な競馬で、バウエコーは無敗のクラシック制覇を達成。ビリー・ロックナーンにとっても、英国クラシック初制覇となった。

なお彼の名前、Loughnane。中ほどのghは発音しないことが多く、筆者も当初はラフネーン、もしくはラフナーンなのかと思っていたのだが、複数の英国人に確認すると、Loughnaneは「ロックナーン」と発音することが判明。以降は、ビリー・ロックナーンと表記することにしている。